役立たずのフルンティング

ライアン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シルヴァリオラグナロクのベルグシュライン卿に実の兄が居たらというオリジナル主人公投入物の短編です。

目次

挫折 ―― 1
命令 ―― 13
再起 ―― 22
勝利と栄光 ―― 30
悲願 ―― 39
役立たずのフルンティング ―― 47
凡庸なるアルフレッド（バッドエンドⅠ ―― 55
F）

挫折

――――人を妬まぬ者は運が良いだけだ。出会った事がないだけだ。神々の寵愛を一身に受けた者に。

あるところに二人の兄弟がいた。二人は端的に言えば孤児と呼ばれる存在であった。身寄りは存在せず、物心ついた頃には親も無く、そじて自分たちの名前すら知らずに彼らは二人きりであった。何故自分達が孤児なのかを彼らは知らなかった。彼らが知っているのは互いが兄弟であるという事だけであった。

「俺たちは互いに血を分けた兄弟だ。だから親や大人が俺たちを見捨てたのだとしても俺たちだけは絶対に互いを裏切らないようにしよう。お互い支え合って生きていくんだ」

そう告げる3つ年上の兄に弟は無言のまま頷いた。兄弟はその言葉を実践し互いに助け合い、生きていた。身寄りがない孤児である二人にとってみれば頼れる者はお互い以外に居ない以上、それは必然だっただろう。助け合わなければ生きていけなかったの

だから。それでも庇護者のない子供が二人きりで何が出来るわけでもない、程なくすれば路上に子供の死体が二つ転がる事になっていただろうが、しかし神祖は彼らを見捨てはしなかった。聖教国に於いて最大の名門とされるヴェラチュール家が運営する施設、そこに二人は程なくして拾われたのだ。そして兄の方にはアルフレッド、弟の方にはウィリアムと名前も与えられた。

　そこまでであればよくある美談で終わっただろう。富める者が上に立つ者の責務として貧しき者に手を差し伸べてそれに二人の哀れな孤児は救われたーーーと良識的な貴族が他国に比べて多いカンタベリーに於いてはそう珍しい話でもない。そうした孤児院や救貧院を運営している貴族は腐敗と停滞が進んできている軍事帝国アドラーや弱者救済の考えが薄いアンタルヤ商業連合ならばいざ知らず、信仰と教義を奉ずるカンタベリー聖教皇国にはガラハッド家を筆頭に多数存在するのだから。しかし兄弟を引き取ったのがヴェラチュール家の運営する施設であったが故に話はそこでは終わらない。端的に言えばそこはただの養護施設ではなく国家のーーー否、神祖の手足となる人材を養成する一種の修練場であったのだ。ただしそこに引き取られたものが不幸であったかと言えばそうとは断言出来なかった。

　課される訓練は確かに血が滲む程に厳しいものであったが、命や四肢を失うような理不尽な者は皆無。優秀な手足を育成するための施設であるが故に他の施設に比べれば

はるかに潤沢な資金を注いで運営されるそこでは何時だとて暖かな食事と清潔な寝具と衣服が提供されたし、遊興に耽る事も推奨された。

「この世はあればあるほど良い。極論すればこの世には効率の差はあれど無駄な時間などというものは存在しないのだよ。何も訓練だけが自分を磨くための時間ではない。よく学び、よく動き、そしてよく遊びなさい。同じ釜の飯を食った仲間というのは中々どうして諸君の人生を彩ってくれるものだぞ」

施設を運営する最高責任者にして子供達にとっては厳しくも優しい教師にして親でもある絶対者グレンファルト・フォン・ヴェラチュールは常々そう唱えていた。そこに互いに蹴落とし合う蟲毒が如き凄惨さは存在しない。切磋琢磨させる為に互いに競い合う事こそ推奨されたが、それもあくまで蹴落とし合うのではなく自らを高めることによって相手を超える事を求める健全な競争関係。そして勝負の結果負けた側への配慮もグレンファルトは決して欠かさない。

「落ち込むなとは言わん。その悔しさは自らをより飛躍させる為に必要な感情だからな。だが自分には価値がないなどと決して思うな。俺にとってお前たちはみな等しく大切な愛弟子であり、そして我が子だ。競争の結果優劣は必然として発生するだろう。だが一度の敗北如きでお前たちの価値がなくなってしまうわけでは断じてない。忘れるな、お前たちは決してもう無価値な存在などではない。他ならぬこの俺、グレンファ

ルト・フォン・ヴェラチュールがそれを保証する」

語りかける言葉とその眼差しは我が子に接する父の如き慈愛に満ちており、故にこそ子供たちは歪む事無く奮起して訓練に精力的に取り組む。基よりこの施設にいるものは兄弟がそうであったように、身寄りもなく、当然満足に他者からの愛情を受けた事もないような者ばかりなのだから。物質的な充足は勿論、愛情と信頼という精神面での充足も与えてくれるグレンファルトは彼らにとってはまさしく神に等しい存在となる。己を磨いて忠義を示し御恩を返すのだと奮起し、誇りを抱きながら同じ思いを抱く仲間と共に修練へと明け暮れる日々。そんな環境下で弟ウィリアムよりも３つ年が上であったが故に身体が出来上がるのも早かったアルフレッドは弟よりも一足先に本格的な修練を行い始めーーーそして順当にその頭角を現し始める。なぜかとその理由を言えばひどく簡単であり陳腐なもの。アルフレッドは天才であったのだ。

「やはり何時の時代にも麒麟児と言う奴は居るものだな。励めよアルフレッド、奢る事無く磨けばその剣あるいはお前が５０になる頃には俺の積み重ねた千年にさえも届くかも知れん。お前が我が片腕にまで昇り詰める日を心待ちにしているぞ」

かけられた期待の言葉はアルフレッドにしてみればまさしく神からの啓示に等しくーーー当然アルフレッドはより一層の奮起を誓い訓練へと励む。才能があり、それを磨くための環境が与えられ、精力的に磨く動機（モチベーション）が存在した。ならばこそその剣は順調

に研ぎ澄まされて行く。そのまま行けばそう遠くない内に《洗礼》という至高の栄誉を授けられる事となるはずの未来はーーー他ならぬ実の弟によって閉ざされる。アルフレッドから遅れる事三年、弟であるウィリアムもまた１０歳となった事で幾多の同輩と共に本格的な修練へと励みだす。そして適性を見るためにと最高責任者たるグレンファルト直々に行われた最初の模擬戦闘の結果はーーー

「ここにきて最高傑作の誕生か、やはり人間は凄まじい」

アルフレッドがいずれその片腕となる事を夢見た主君が発したのは驚嘆の言葉。千年もの間生きる神をして今まで見たことがなかった神域の天才を見つけた驚きの言葉であった。それはありふれた話ではあっただろう、何せ最強の異名を冠する事が出来る者はいつの時代もたった一人だけなのだから。単に今まで幾多の同輩がアルフレッドを相手に抱いてきた想いを今度はアルフレッドが実の弟を相手に味わう事になったというそれだけの事。１００年に一人の天才足る兄が霞む１０００年に一人の才を弟を有していたという、ただそれだけの話である。

そしてそれは別段気に病むようなことではない。他ならぬ主君が常々言っていた事だ、競争の結果優劣は必然として生じるものだと。そしてそのうえで負けただけでその価値が消滅するわけでは断じてなく等しく自分たちは大切な存在なのだと、そう父であり師でもある偉大なる神は言っていた。ならばこそ落ち込む必要はない、至らぬ者は至

らぬ者なりに主君の力となれるよう努力すれば良い。実際今まで自分に負けた数多の同輩達はそうして来たではないかーーーと、そんな理屈を理解できる程度にはアルフレッドは聡明であったが、同時にそうした理屈のみで自らの心を納得させられる程に大人ではなかった。

「まだだ、ウィリアムの才が俺を上回るならば俺はその才を上回るだけの努力を重ねれば良いだけの事」

　そう己を叱咤してアルフレッドは死に物狂いで修練へと明け暮れた。これでウィリアムが己が才に慢心するような驕った天才であれば重ねた努力を以て才能に勝利するという大衆好みの物語が演じられたかもしれない。しかし、神祖グレンファルトが見出した千年に一人の神剣はそんな生易しい存在などではなかった。努力する事を苦と思わず当然のように常人であれば数日どころか数時間もすれば音を上げるような修練を己に課し、自らを磨く事に余念がない。そして当然のようにどれだけ己を磨こうとしても一日は２４時間しかない。ならばこそ努力の量を以て相手を上回ろうとしても物理的にそれは不可能となる。ならば量ではなく密度によって差をつけようとしてもそれもまた同様に不可能であった。何故ならば天才とは１を聞いて１０を学ぶ成長速度を持っているからこそ天才と称されるのだから。努力の量が同じなのであれば、当然のようにより才能を備えている方がより成長していくのは当然の事。アルフレッドが唯一

持っていた3年先に修練を始めたという弟を上回る要素もその才能を前に瞬く間に覆されていく。誓ってアルフレッドは怠けてなどいない。しかし、それでも才能という余りに残酷な差はアルフレッドに無情な現実を突きつける、すなわちどれほど自分が最善を重ねようとも弟には敵わないのだと。それでもまだだ、まだだと吠えようとしたところで絶対の忠誠を捧げた主君がそれを制止する。

「まず最初に言っておこう。俺は今でもお前の事を違わず評価している。アルフレッド、百年に一人の才を持つ我が愛弟子よ。お前がその才に驕る事無く重ねた修練を俺は余さず理解している。そして父として誇りに思う。よくぞその年でそこまで練り上げた」

告げられる言葉は常と変わらず慈愛に満ち、その視線は春の陽射しのように暖かかった――しかし常ならば喜びを齎してくれるその言葉が今のアルフレッドには死刑宣告も同然に聞こえた。

「その上でお前を俺の使徒とする事は出来ん。理由はお前もわかるだろうが、お前の弟ウィリアムがお前を上回る才の持ち主だからだ。いやこればかりはめぐり合わせが悪かったという他ない。何せお前の弟と来たらこの千年、俺をしてお目にかかった事がないほどの才を持っていたのだからな。俺がスメラギの奴位《洗礼》を施すのが上手ければ、兄弟揃って使徒とする事もやぶさかではなかったのだが――あいにく俺はアイツ

程に上手く無くてな。同時に二人以上の使徒を作ってしまうと、俺自身の力が大きく減退してしまうのだよ」

　告げられる言葉は予想通りのものであり、アルフレッドは足元が崩れる落ちるような気分になった。しかし、同時に心の底でどこか安堵している自分が居た。もうこれ以上無理をして弟を超えようなどと分不相応な事をしなくて良いのだと、そんな風に。

「無論人間は可能性の怪物だ。常軌を逸した精神力で以て、才能の差を覆すという事例をこの千年俺は飽きるほどに見てきた。ならばこそお前が弟を超える可能性も０とは言わん。しかしその可能性を生み出す事が出来るのは光に焦がれ、狂気と呼べる領域に手を伸ばすどころか躊躇いなく突っ込む事が出来る破綻者だけなのだよ。そして俺は我が子の幸福を願う一人の親としてお前にそうなって欲しくはないんだ、アルフレッド。重ねて言うが俺はお前を今でも違わず評価し、誇りに思っている。アルフレッド・ベルグシュラインは俺の誇る愛弟子であり愛し子だ」

　ただ実弟であるウィリアム・ベルグシュラインと比較すればどうしても前者の方に軍配が上がってしまうのだと告げられた言葉を前にアルフレッドは

「……仰せのままに、我が主君（あるじ）」

　やっとの思いで絞り出した一言を告げると共に、己が挫折を受け容れるのであった

……

・・・

「ーーーといわけでだスメラギ、お前には手間をかけて申し訳ないが我が愛息子アルフレッドへのフォローを頼みたい」

居並ぶ千年の付き合いとなる仲間たちを前にグレンファルトは総代聖騎士としての仮面を脱ぎ捨てて告げる。

「はいはい了解。確かに件のアルフレッド君は弟君からしばらく遠ざけた方が良さそうだーーー彼が諸々折り合いをつけられる大人になるまではね」

そしてそのリーダーからの頼み事を聞き終えた教皇スメラギは納得と共に頷く。なるほどなるほど、確かにこれはしばらく自分が預かった方が良さそうだ。彼にとってはグレンファルトと弟が共にある光景を目にするだけでしばらくは毒となるだろうからと。

「でも珍しいわねグレン、あなたがその辺の塩梅を誤るだなんて」

オウカ・鳳・アマツは自分が仲間の中で一番使徒の扱いが下手だという自覚が存在する。そしてそんな自分に比べて三人は方向性は異なれどよくもまあそれぞれああも上手く扱うものだと評価していたが故に。その筆頭たるグレンファルトが使徒候補の取り扱いを誤ったというのはオウカにとってみればかなり意外な出来事であった。

「いや、こればかりは俺の気が逸っていたという他ないな。何せアルフレッドの奴はこ

れまで育て上げた歴代の片腕達と比べてもなんら遜色がないどころか、順調に育てば屈指と言えるだけの才を持ち合わせていたのだから。まさかその実の弟が兄を超えるどころかこの千年の中でも文句なしに最高の才を持っているなどと言うのは流石に予想外だった。つくづく人間の可能性という奴には驚かされるよ」

苦笑と共にグレンファルトは自らの誤りを認める。人間は与えられたものを奪われるを事強く恐れる生き物だ。アルフレッド以上の才を持つ者が生まれる事を想定せずに己が使徒とすることを示唆してしまったことが早計だったと素直に認め、反省をする。どれほど経験を積んでも自分は無謬とは程遠い未熟者なのだと、驕る事無く失敗を己が成長の糧とし続ける。

「まあ確かに失敗ではあるがそう深刻になる事はあるまい。何せ件の者の悩みなどありふれたものに過ぎぬのだから」

イザナ・フォン・ザンブレイブが告げるようにアルフレッド・ベルグシュラインの悩みと挫折など世に於いてありふれたものだ。最強を夢見たが、自分をはるかに上回る才の持ち主がいた。そしてその才の持ち主は実の弟だったとそんな程度の話だ。変わったところがあるのは単に弟の持つ才能が神祖達をしてこの千年の中で最高と言えるほどのものであり、兄の方も生まれるのが後１００年早ければ挫折する事無く夢を叶えられるだけの才を持ち得ていたというだけの話。ならばこそ幾多の者を導いてきたアル

フレッド・ベルグシュラインの新たな主君教皇スメラギにとってみればその悩みを取り除く事など余りにも容易い事である。
「とりあえずアルフレッド君には早いところ身を固めて貰うとしよう、陳腐な手ではあるけど多分それが一番手っ取り早い」
　つまるところアルフレッド・ベルグシュラインが思い悩んでいるのは彼の視界に映っているのが現状忠節を尽くす事を誓ったグレンファルトと本来自分が就くはずだった場所を奪ったように見える血を分けた弟の二人だけだから。ならばこそ、彼の世界をそれ以外の価値で以て彩ってやればいい。家庭を持たせて愛を教えてやるのだ。それが人を挫折から立ち直せるのに最も有効だと、皇悠也は自らの体験から知っていた。
「イザナ、彼と相性が良さそうな娘を適当に見繕ってくれるかな。自分よりも優秀な妹が居る、彼より数歳年上の子なんかがちょうどいいと思うんだけど」
「同じ境遇から来る共感か、ありきたりではあるがそれだけに有効ではある。あいわかった、適当に数名ほど見繕っておくとしよう。めぐり合わせさえ悪くなければ総代聖騎士殿の片腕が十二分に務まった貴重な人材をみすみす潰すなど勿体ないにも程があるしな」
　重ねて言うがアルフレッド・ベルグシュラインの悩みも挫折も神祖から見ればありふれたものだ。ならばこそ規模こそ違えど似たような悩みを持った者にも当然心当たり

は存在する。

「何から何まですまんな、やはり持つべき者は頼れる仲間だ。俺も親として肩の荷が降りたというものだよ」

ならばこそアルフレッド・ベルグシュラインは順当に挫折から立ち直り再起するだろう。偉大なる神祖の導きによって彼らの狙い通りに愛を知り、やがて抱いた苦悩と挫折を若気の至りとして昇華させるのだ……

命令

「さてそれではアルフレッド・ベルグシュライン、汝のその忠節に報いる為にこれより教皇スメラギが祝福を与えようーーー君にして見れば我が片腕足る総代聖騎士からではなく僕から受ける事に忸怩たる想いがあるとは思うが、まあ理想通りにはいかないのが人生というものだ。その辺は今すぐにとは言わないからおいおい折り合いをつけてくれたまえ」

威厳と親しみ易さ、相反するはずのそれらを同居させた若き少年教皇はそう忠実なる手足へと語りかける。

「不満などと滅相も御座いません。弟には到底及ばぬこのナマクラが教皇猊下直々に《洗礼》を与えて頂ける栄誉、身に余る光栄だと重々承知しております」

幼少よりこの国を統べる四人の神祖こそがこの世に降り立った現人神だと教えられ、それを自然と信じるようになったアルフレッドからしてみればそう答える他ない。何せ目前に居る人物もアルフレッドが忠節を捧げる事を誓ったグレンファルトと同様に神祖なのだから。

「無理に取り繕う必要はないさ。君が神祖(ぼくたち)にではなくグレン個人へと忠誠を捧げている

事位理解しているし、それを咎めるつもりもない。何せグレンファルト・フォン・ヴェラチュールこそが君にとっての親であり、兄であり、そして師であったのだから。

今日初めて会った僕にグレンと同等の忠誠なんてものは捧げられなくて当然だし、そんな無茶を言うつもりもない。周囲に咎められない程度に礼節を守って課せられた責務を果たしてさえくれれば君の内心まで束縛するつもりはないさ」

駆け出しであった頃ならばいざ知らず今この場にいるのは人生の酸いも甘いも散々に味わった不滅の神祖スメラギ。表向きは媚びた態度を取りながらも裏でこちらを出し抜かんとする連中と散々に渡り合ってきた彼にしてみればもはや内心での不敬など咎める気さえ起きない些事でしかないものだ。

むしろそうした油断ならぬ者達に比べれば目前の素直な若者ははるかに扱いやすく、そして好ましい存在だ。最もかけた言葉は本心であると同時にそうした寛容な態度をとる事こそが結局のところ一番速やかに心からの忠誠を獲得する事が出来るという長年の経験に基づく計算によるものでもあったが。

「ただ二つ程君に言っておくことがある。まず一つ目、これは君の新たな主君としての命令だ。自らをナマクラなどと卑下するのは止めなさい。客観的事実として君はあのグレンが百年に一人と見込んだだけの才を持ち、それに驕る事無く磨き上げた十二分に優秀な人物だ。

そんな君が自らを殊更貶めるのは周囲を追い詰める結果にしかならないし、君に敗れて来た者達、そして君を見出し育てたグレンをも侮辱する事になる。何より自虐は癖になって君自身の成長をも阻害する。端的に言って百害あって一利なしだ、以後慎みなさい」

「……承知いたしました」

心情で言えば反論したい気持ちがアルフレッドにはあった。しかし神祖スメラギの言う事はどこまでも正論であり、それを理解できるだけの思慮がアルフレッド・ベルグシュラインには存在した。故に肯定以外の選択肢はなかった。

「うん、素直で結構。内心ではまだまだ折り合いをつけられてはいないのだろうが、何、理解が出来ているのならばそう遠くない内に出来るようになるさ。なんといっても君はあのグレンが見出した逸材なのだから」

そしてそんなアルフレッドの内心を正確に推し量りながらも神祖スメラギは満足気に頷く。やはり正論を素直に理解して呑み込んでくれる出来る奴を相手にすると手っ取り早くて良い、流石は我らのリーダーが自らの片腕にせんとしただけの事はあると。

「そして二つ目だがこれはグレンの友人としての言葉だ。グレンファルト・フォン・ヴェラチュールは決して君に見切りをつけたのでも見捨てたわけでもない。むしろその逆、君の幸福と栄達を師として願えばこそ友人である僕に君を託してくれたんだ。

その事をどうかわかってやって欲しい、これはグレンの友人としてのお願いだ。今は完全に納得する事が出来ないだろうから胸に留め置いてくれるだけで良いよ」

「それは無論……」

理解している。偉大なる神祖グレンファルトが自分を疎んじて神祖スメラギに預けたというわけではないことを。注がれた愛情と信頼、それらはアルフレッド・ベルグシュラインの心にしかと刻み込まれている。その恩義を返すためにも片腕となる事を切望したのだから。そしてその片腕に見出されたのは自分ではなく弟だという結論が他ならぬグレンファルトから下された以上、いつまでもそれに拘泥し続ける事こそ不忠なのだという事も。アルフレッドの同輩達も皆《洗礼》を施されて使徒となる事を夢見ながら、それがかなわず、それでも立派に忠節を果たしているのだから。片腕となる事を自らが夢見たグレンファルトではなくとも、現人神足る同じ神祖から《洗礼》を施されるという至上の栄誉は歓喜に咽び泣いて然るべき事であるーーーと頭では理解している。

「では、神託を授けようーーーアルフレッド・ベルグシュライン。

憧憬（ヒカリ）に目を焼かれる事無く、視野を広く持ちなさい。そうすれば君は必ずや一角の人物として大成する事だろう。まあ要は現実と折り合いをつけて我慢を覚えなさいという事さ、それこそが大人になるという事なのだから」

「――――ッ!!!!!」

齎された恩寵によって迸る激痛、それをアルフレッド・ベルグシュラインは修練により培った胆力によって耐える。絶叫が木霊する事は無く、されど流石に堪え切れずにアルフレッドはその場に膝を突く。

「無理はしない方が良い。その精神力は中々に見上げたものだけど、それも時と場合によりけりだ。苦痛に耐えれば必ず成長につながるというわけではないのだから、この場は素直に意識を手放しておきなさい。それを無様だと笑ったりなどしないさ」

与えられた許しの言葉、それを受けてアルフレッドはその意識を手放すのであった。薄れゆく意識の中で弟ならばこの痛みにさえ平然とした顔で耐えてのけるのだろう等と思いながら……

・・・

「さてそれでは我が使徒アルフレッド、君に最初の命令を与えよう。君、お見合いをしたまえ」

「……は?」

意識を取り戻し参上したアルフレッドに対して告げられたのはそんな予想だにしていなかった言葉。さしもののアルフレッドも全くの慮外の自体に呆けた様子を浮かべる。

「お見合いだよお見合い、要は早いところ良い相手を見つけて身を固めなさいって事さ」
「それは一体……？」
「まあ特に隠す必要もないからぶっちゃけて話しちゃうけどーーーこのまま君が弟に対する劣等感だとかを変に拗らせちゃうと神祖としては困ったことになるんだよね。散々に言っている事だけど、君は中々どうして優秀な奴で得難い人材なわけ。百点満点取れている奴が１２０点取るような奴が身内に居るからといって７０点しか取れてないような連中の前で自分は弟に比べれば塵だ何だみたいな態度取られちゃ悪影響しかなくてこっちとしてはたまらないんだよ。で、君は頭が良くて出来る奴だからこの辺理解はしてくれているんだとは思うけど、まだ納得までは出来ていないだろう？」
　こちらの内面を完全に見透かした主君の言葉、それに感服しながらアルフレッドは無言で首肯する。そう理解できている、頭では主君のいう事が正しいと認められているのだ。だというのに心の中で幼稚な自分がそれに異を唱えているのだーーーそしてそれがまたあの完璧な弟ならばこんな煩悶は抱かないだろうと自己嫌悪へと繋がっていく。
「うん、そこで素直に頷ける辺りやはり君はとても優秀だし出来る奴だよアルフレッド。本当に出来ない奴はこの手の事を言うと大体逆切れするのが定番だからね。そんな君だからこそ僕たちは出来るだけ長くちゃんと神祖の為に働いて欲しいわけ」
　神祖スメラギは自分たちの真実を知っている使徒の前で己と言葉を取り繕おうとは

しない。「君の為なんだ」などというお決まりの言葉は本心からそれを言える聖者でもない限りお為ごかしにしかならないと知っているが故に。こうして腹を割って本音を打ち明けているように見せる事が最も効果的に相手に自らへの親しみを与えられるのだと知り尽くしている。

「そしてそんな悩める君に最もオススメなのが所帯を持ち家庭を作る事なのさ。君が真実その辺全く興味ないというのならば話は別だけどーーー君はそういうタイプではないはずだ」

神祖スメラギの言葉はまたもやアルフレッド・ベルグシュラインという男の正鵠を射抜いていた。アルフレッドは一般的に見れば大よそ無欲と言って良い。少なくとも彼を指して欲深い等と称す者はまず以ていないだろう。しかしそれでも、剣として完成され真実その手の欲求が絶無と言って良い弟とは違い、アルフレッド・ベルグシュラインは人間であった。人間であるが故に名誉欲に食欲ーーーそして性欲とて存在する。そしてそんな点がアルフレッドからしてみればまた忸怩たる想いを抱かせる所以でもあったーーー何故自分は弟のように欲望を超克した理想の剣で在れないのかと。

「その表情、きっとまた君は弟と比較してどうして弟のようになれないんだと思い悩んでいるんだろうけど神祖(ぼくら)からすると全く真逆さ。君にもしも全くその手の欲が全くなくて真実グレンの剣になる事が自分の全てだーーーみたいな感じだったら逆に困ると

ころだった。
　だって考えても見なよ、どれだけそれを望む者が多かったとしてもそれを与えられるのはたった一人だけでそれを君に与える事は出来ないんだから。完全無欠に無欲な聖者よりも俗な部分があってくれた方が僕たちとしては有難いのさ。ま、余りに欲深で理性とのバランスが取れないような俗物だったらそりゃ今度は別の意味で困るんだけど、その点君は俗な部分がありながらも極めて理性的だ。神祖からしてみると理想的なバランスとさえ言っても良い」
　俗であることそれは決して悪い事ではないのだと千年生きた支配者は青臭く未熟な若者を教え諭していく。
「まあつまるところ今の君は弟という憧憬に若干目を焼かれちゃって自分を客観視出来ていない状態なわけ。だからこそのお見合いなのさ。愛する人を見つけ、その人と家庭を作り育みなさい若人よ。それはとても素敵で多くの事を君に教えてくれるものだ」
　ほんの一瞬超然とした神祖からかつての幸福な思い出を振り返る一人の男へと立ち返り皇悠也は目前の若者へと告げる。
「というわけで神祖の顔を立てると思って物は試しにやってみてくれたまえ。ああ、君と相性が良いと思った候補は何人か見繕ったけど誰を伴侶にするかは自由に決めると良い。結婚生活はお互いの相性が大事だからねーーー何だったらそれこそ別に僕らが

勧める相手じゃなくたって良いんだぜ。流石に他人の妻や婚約者に手を出すみたいなのは色々と面倒だから勘弁して欲しいけどね」

「……仰せのままに、教皇猊下」

どこまでも慈悲深い態度で好きにやりなさいと告げる主君からの命令(おせっかい)に肯定以外の選択肢はアルフレッドにはなく、その場を退出するのであった。ほんのわずかに出会いに対する期待に胸が膨らむ事を自覚し、そんなどこまでも欲望を超克した理想(道具)となる事が出来ない己を嫌悪しながら……

再起

結論から延べればアルフレッド・ベルグシュラインはどこまでも模範的と言える優等生であった。見合い相手であるキリガクレの女性と出会って瞬く間に恋に落ちるーーーという事にこそならなかったが、自分よりも優秀な妹を持ち大切に想いながらも時折疎ましく思ってしまう事、そしてそんな己を嫌悪してしまうという彼女に共感し、その献身的で健気な姿に惹かれるようになるのに然程多くの時間はかからなかった。

――――アルフレッド様はご立派です、何も持たぬ身から己を磨きついには使徒にまでなられたのですから。

そしてそんな女性の世辞等一切込められていない自分に対するどこか羨望の込められた賛辞がアルフレッド・ベルグシュラインに他者から見た己がどのように見えているのかを否応なしに突きつける。重ねて言うが、《洗礼》という栄誉を神祖から賜ることが出来るのは限られた極一部の者だ。神祖にその素質を見込まれて役に立つと判断された限られた者だけが使徒となる。当然使徒となる事を目標として励みながらも叶わぬ者とてごまんといる。

理解しているはずだったーーー理解しているはずだったというのに千年に一振りの神剣の輝きにその目を焼かれていた名剣は自らが放つ輝きを真の意味で自覚していなかった。アルフレッド・ベルグシュラインはこの時ようやく神祖がたびたび自分に対して言っていた自らを卑下する事は周囲を貶めるも同然だという言葉を真の意味で理解できたのだ。

「やあアルフレッド、どうやら交際は順調のようだね」

感心感心とにこやかに笑いながらこちらの心を見透かしながら告げられる言葉にアルフレッドはただただ恐れ入るばかりであった。

「……恐縮です」

「おっと、年寄りが余り若者たちの恋路に口を挟むものじゃなかったね。まあその調子で大いに青春してくれたまえ若人よ」

完全に解消されたわけではないがそれでも確実に効果が表れている事を確認し神祖スメラギはにこやかに微笑む。一方のアルフレッドの心境と言えば複雑であった。なるほど確かに神祖の勧めに従い彼女と出会った事でアルフレッドは久しく味わっていなかった安らぎを得る事が出来た。だがそれは同時に心の中で猛り燃え盛っていた炎が消えていくような感覚をアルフレッドに与えた。きっと自分が彼女と会っている間も弟は自らを練磨しているのだろうーーー等とそんな後ろめたさが拭えないのだ。

「これで良いんだろうか？って顔をしているね。良いんだよ、それで。むしろ君が弟を超えたいと思うのならそちらこそが正解なんだ」

そしてそんなアルフレッドの心理をまたもや完全に見透かし神祖は使徒を導く神託を下す。

「それはどういう……？」

「まず大前提としてこれはもう他ならぬ君自身が骨身に染みてわかっているとは思うけど、戦闘という分野においてアルフレッド・ベルグシュラインはウィリアム・ベルグシュラインに勝つことは出来ない。なぜかと言えばこれは全く以て無情な事に才能の差という他ない。君の弟が己の才能に溺れて競走中に居眠りするような間抜けな兎ならば君にも勝ち目はあったんだろうけど、そんな慢心とは無縁の本物の天才と来たものだ。これじゃあ才能に劣る側にはどう足掻いたところで勝ち目はない、此処までは理解できるね？」

懇々と告げられる言葉、それはアルフレッドも嫌と言う程に実感させられたことであるが故に頷く以外にはない。

「まあ中には気合でその辺の条理を粉砕してしまう例外野郎（トンチキ）も居るけど、これは全く以て模倣には向いていないし、神祖（ぼくら）としても真似して欲しくはない。なぜかと言えば彼らはいつ炸裂するかもわからない爆弾を搭載して暴走する機関車のような存在だからだ。

既存秩序を破壊して世に変革や革新を齎す事に関してはピカ一であっても、守護者としては落第だ。そして神祖(ぼくら)が君達使徒に求めているのは前者ではなく後者の在り方に他ならない」

何故ならば不滅の神祖が統べるこの国に於いて既存の秩序を破壊し変革を齎そうとする者というのは即ち神祖への反逆者に他ならないのだから。

故に神祖スメラギは入念に目前の逸材が万一にもそちらの方向へと行ってしまわないように巧みに誘導をしていく。

「話を戻すけど君は確かに戦闘という分野において弟を超える事は出来ないだろう、まずはそれを認めなければならない。その上で君がどうしても弟を超えたいというのであれば方法は至って簡単、戦闘以外の分野で弟を超えればいいのさ」

ね、簡単だろう?とにこやかな表情で告げられたその言葉にアルフレッドは虚を突かれたような気分になる。そしてそんなアルフレッドの様子を確認しながらも教皇スメラギは迷える子羊を導くべく続けて行く。

「確かに君の弟はグレンをして千年に一人と称した逸材だ。戦場に於いてはまさしく無双の神剣となって活躍してくれるだろう。でもはてさて戦場以外の分野でだったらどうだろう?グレンが見込み仕込んでいる以上将として無能という事は無いだろう、だけど果たして挫折を一度たりとも味わったことのない最強無敵の絶対剣士は真に兵士の

心を理解することが出来るかな？やらなければいけないとわかっていながら、気分が乗らない、明日やろう、そんな怠惰へと流されてしまう凡人の気持ちがわかるものかな？

――――断言するがまず以て無理だ。故に剣士としては無双の神剣であったとしても将としてはどうしても限界が出てくるんだよ君の弟は」

長所と短所は表裏一体。剣士として比類のない強さを誇る無双の存在は一度人を纏める将として見た時にその傷一つない完璧な在り方が逆に欠点になってしまうのだと最強等と言う称号へのこだわりをとうの昔に捨てた神祖はどこまでも無情に告げる――ただグレンファルト・フォン・ヴェラチュールという全てにおいて優れた手腕を持つ万能型の極みのような存在にとってはそうした特化型の方がある意味では重宝するのだという事は現状伏せたままに。

「まあこれに関しては君も大概出来る奴だから真の意味で理解できるかと言えば怪しいところではあるんだが、それでも弟に比べれば君は幾分か見込みがある。何故ならば君は既に挫折を知った。そこに伴う痛みや悔しさを知った。当然だけどこの世に挫折を味わった事がない人間なんて早々居ないからね、理想通りに生きられる君の弟みたいなのは神祖（ぼくら）からしても初めてと言って良い希少例（レアケース）なんだよ本当に。

そして希少というのは何も良い事ばかりじゃない、希少というのはすなわち共感できる普遍性がないという事でもあるのだから。だけど君は既に知っただろう、同じ経験を

したものが共感と共に自らに寄り添ってくれるその有難さを。愛情と呼ばれるものの素晴らしさをーーーね、俗であることが決して悪い事じゃないというのが今の君ならよくわかるだろう？」

アルフレッドの蒙を啓く為に告げられる数々の言葉、それをアルフレッドは首肯する他ない。これが彼女と出会う前であればそれでもと心の中の幼稚な自分が叫んだだろう。胸の内で燃え盛る炎がその身を焦がしただろう。しかし、神祖の狙い通りに愛情によって絆された事でアルフレッド・ベルグシュラインの心の中で猛っていた炎は燻る程度にまで鎮められた。ならばこそその聡明さゆえに理解出来る神祖の教えは蒸発する事無く、その胸へと染み渡っていく。

「常々言っている事だけど、この世はあればあるほど良いんだ。そして既に君は弟が持っていないいくつかのものを持っているーーーそら、この時点で君が弟を超える事が出来る見込みが十分に出てきたと思わないかい？」

妬心によってその精神が拗れてねじ曲がり爆発しないようにしながらも神祖は若人の健全な競争意識を煽る。それこそが人の成長を促すのに極めて有効だと理解しているが故に。

「君の弟が戦闘特化（スペシャリスト）としての究極になるというのならば君は万能型（ゼネラリスト）としての究極を目指しなさい。愛を知りなさい、友情を知りなさい。人として多くの事を学びなさい。それ

らすべての経験が君を高みへと導いてくれる、だって君は出来る奴なんだから」
ならばこそ如何なる経験も決して無駄にはならないという啓示に
「仰せのままに教皇猊下！」
アルフレッド・ベルグシュラインは万感の思いを以て言葉と両眼に覇気を漲らせながら応じる。与えられた啓示はアルフレッドにとってとても受け容れやすいものであったから。
挫折と言う苦悩を味わったからこそそれを知らぬ弟に勝つことが出来るという理屈はその痛みを知っているアルフレッドからしてみればとても心地良いものであったのだ。
「うん、素直でよろしい。そうと決まればこれからガンガン働いて貰うから覚悟するように。君は何といっても出来る奴だからね」
出来ない奴に出来るようになれ等と神祖は言わない。何故ならば出来ない奴は出来ないのだから。必死に出来る奴にしようと宥めて煽てて丁寧に導いたところでそれでようやく半人前が一人前になっておしまいなのだから。零細企業の社員ならばいざ知らず一国のトップがやるものとしてはとてもではないが払うコストに対してリターンが見合わない。神祖直々に手塩にかけて育てるような者はそれをするだけの価値があると認められた一部の才人だけなのだ。

そしてアルフレッド・ベルグシュラインは数多の使徒を導いた神祖スメラギをして麒麟児と呼ぶに相応しい模範的な優等生であった。才能がある。それに胡座をかかずに鍛錬を続ける向上心と精神力がある。人らしい欲求がちゃんと存在し、それを律することの出来る強固な理性がある。神祖にとっては極めて優良な使徒(手駒)となってくれる逸材であった。

教皇直属騎士という立場で教皇スメラギの有能にして忠実な手足として文武問わず奔走し、懐刀として順当に頭角を現し始めたアルフレッド・ベルグシュラインがキリガクレの令嬢マヤ・キリガクレと正式に夫婦となったのはそれからわずか3年後の事であった。

勝利と栄光

総合値による弟超え、そんな新たな目標を掲げるようになった使徒アルフレッドは主君である神祖スメラギの理想通りの成長を遂げていく。スメラギがアルフレッドへと課す仕事は武官の範疇を超えて本来文官が担うようなものもあったが、アルフレッドに不満など出ようはずもない。何故かと言えば

「これはどこの国にもついて回る宿痾なんだけど、うちの国でも文武の対立というのは存在してね。まあ人間三人集まればその時点で派閥が出来るという言葉もあるし、結局予算という資源（リソース）に限りがある以上これは必然なんだが、当然これが余りに激しくなってしまうとよろしくない。外敵よりも本来仲間であるはずの存在が憎い典型的な内ゲバ状態になっちゃうわけ。

勿論トップである神祖（ぼくら）が手綱を握り都度調整はしているんだけど、僕らの命令通りに動いてくれる忠実な手足だけではなく意志を汲んでバランスを取ってくれる調整役が居てくれると色々とありがたいのさ。で、君なら神祖（ぼくら）のそうした意図を正確に汲んでくれるようになると期待しているわけだ、使徒アルフレッド」

疑問に思って問いかければ何故自分にその仕事を任せるのか、将来的にどういう存在

になる事を期待しているのかを丁寧に回答してくれるのだから。最強の剣士（戦闘面での弟超え）へと拘っていた頃ならば理屈を理解できても心のどこかで納得し難い想いを抱いただろうが、それはもはや過去の事。

究極の万能型を目指す事こそが偉大なる神祖の為であると同時に自分が弟に勝つ正着だと納得できたが故に迷いはない。今でも神祖グレンファルトがアルフレッド・ベルグシュラインにとっての父にして師である恩神なのは変わらないが、一連の導きを受けた事で神祖スメラギもまた忠節を尽くすべき主君であると心の底から思えるようになった以上それは猶更だ。

「というわけで3日後までに此処にある資料、粗方読んで頭に入れておいてくれたまえ。百聞は一見に如かずとは言うけど最低限の予習はしておいて貰わないといい経験にならないからね。君の場合はグレンのところで最低限の基礎は仕込まれているから、素人考えで底の浅い思い付きをプロの前で鼻高々に披露するみたいな事はしないだろうけど、それでもやっぱり本職達に比べればという奴だ」

「仰せのままに教皇猊下」

不滅の神祖スメラギはこれまで数多の使徒を導いてきた。ならばこそ当然人材を育成する力だとて習熟している。無論如何に師が優れようと教え子本人にやる気がなかったり、素質がなければ話は別だ。だがアルフレッド・ベルグシュラインはその双方

を備えていた。流石に剣士として同様に１００年に一人の才能を持つ天才ーーーとまでは行かなかったが、それでも数多の人間を導いてきたスメラギをして十二分に優秀と言えるだけの才覚があった。そもそも戦闘や研究という分野ならばいざ知らず、政治の分野において神祖は革新者（天才）を求めていない。

何故ならばかつてスメラギ自身が語った通り、この国の支配者である神祖が求めているのは斬新な発想や強固な意志力で以て改革を成し遂げる破壊者（天才）ではなく、既存秩序を維持し効率良く運用してくれる秀才（守護者）だからだ。強固な意志と時には武力という力を以て他者を屈服させて既存秩序を塗り替える如何にも民衆が待ち望む英雄ではなく、堅実かつ地道に粘り強く調整を行いながら最も無駄なく効率良く国を回してくれる存在、それこそが政を司る神祖スメラギの求める人材に他ならない。

「最初の内ーーーそうだね、およそ１年位は何が出来るという事もなく苦労する事になるとは思うが、それを己が糧としなさい。君ならばそれが出来るものと信じているよ」

主君の語った通り最初の１年は苦労の連続であった。何せアルフレッド・ベルグシュラインは本来は総代聖騎士であるグレンファルトの下で武官として働くはずであったのだから。

剣士として、騎士として超一流となるべく仕込まれた１００年に一人の天才も政（まつりごと）においては素人に毛が生えた程度でしかない。何が出来るでもなく無力感と辛酸を味わ

う日々。わかっていた事とは言え当然のようにストレスは溜まっていく。

しかし、主君に対する忠誠心が、弟を超えるという想いがアルフレッド・ベルグシュラインを支えて奮い立たせる。何よりもアルフレッドには死に物狂いで努力をした経験があった。千年に一人の天才を超える為に足掻いた日々。結果としてその足掻きは届かずに終わったわけだが、それでも重ねた経験は決して無駄にはならない。何故ならばアルフレッドは努力の仕方を知っているから。ならばこそ痛くて苦しいそれを己が糧として進み続ける事が出来る。そしてアルフレッドは孤独ではなかった。愛する女性との逢瀬が彼の心に安らぎを齎した。偉大なる神祖直々にかけられる期待の言葉がその心を奮い立たせた。

「出来ないことが苦しいんだろう？何故自分はもっと上手くやれないんだって無様な自分が情けなくて仕方がないんだろう？わかるよ、その気持ち。神祖（ぼくら）もかつて味わった事だからね。でも大丈夫。心配する事は無い、何度も言うが君は出来る奴だ。

無限の希望も絶望も重ねた全てが俺の力だ……なんていうのは君の敬愛するグレンの口癖だけど、まあつまりはそういう事さ。練磨するという行為にはどうしたって痛みが伴う、だけどそれを乗り越える事で石ころでしかなかった原石は光を放つ宝石となる事が出来るのさ。そして君ならばその痛みを乗り越えて珠玉の輝きを放てるようになると信じているよ、アルフレッド」

そうしてアルフレッド・ベルグシュラインは順当にそして神祖の期待通りに成長を遂げていく。

幼少期より支配者の忠実な手足となるべく育成されたが故に「増税という形で民衆の懐から直接押収した場合反発を買うが、私服を肥やした腐敗貴族へと誅罰を下し、その財産を社会的弱者に還元するという間接的な形ならば民衆は快哉を挙げる」といったやり方も反発めいた感情を覚える事無くむしろその巧みさに畏敬を覚えながら受容する。何故ならば彼はかつて無辜の民草が孤児であった自分たちを居ない者が如く扱った事を知っているから。大半の人間が善良で居られるのはあくまで自らの懐が痛まない範囲の場合だと知っているが故に円滑に国を回すためにはそうした小細工の一つや二つ必要だと理解することが出来る。それでいて苦境にある時に手を差し伸べられる喜びを知っているが故に行き過ぎた自力救済信奉者になる事もなく、どこまでも支配者たる神祖にとって理想的な成長を遂げていく。

そうして主君の告げた通り1年もすると歯車が噛み合い出していく。文武を問わず教皇スメラギの忠実にして優秀な手足として働く日々。敬愛する主君の期待と数々の御恩にようやく自分が応えられるようになったという事に確かな喜びを得ながら誇りと共に勝利と栄光を重ねる日々。それらが心の中で燻っていた弟への想いを確かに昇華させて行き……

「兄上、この度はご結婚おめでとうございます」
アルフレッド・ベルグシュラインとマヤ・キリガクレの結婚式の日、そこで共に神祖の忠実なる使徒たる兄弟は必然として再会を果たす。平時とほとんど変わらぬ鉄面皮の弟へと兄は苦笑を零しながら応じる。
「ああ、ありがとうウィリアムーーーしかしお前こういう時位笑顔の一つでも浮かべたらどうだ。血の繋がった兄の晴れ舞台だぞ?祝ってくれているのはわかるが、それではせっかくの想いが通じん」
かつては視界に収めるだけで心に荒波を巻き起こしたその欲望を超克した剣として完成された在り様を見てもアルフレッドの心の中に起きるのは小波程度のもの。かつては超然として憧れたその在り方も今のアルフレッドからすれば不器用さの現れと見えるようになっていた。
「……申し訳ございません。兄上の仰る事もわかりはするのですが、何分この身は武骨な剣であります故」
「やれやれそんな事ではお前の妻となる者は苦労するな」
「それについては無用の心配でしょう。この身は一振りの刃、妻を娶る予定などありませんので」
ウィリアム・ベルグシュラインとアルフレッド・ベルグシュラインとでは主君から求

められている用途が違う。万能型（ジェネラリスト）としての働きを主君より期待されたアルフレッドの場合は名門キリガクレ家の令嬢を娶る事は己が成長へとつながるものだろうが、ウィリアム・ベルグシュラインが主君よりも求められるのはどこまでも私情を挟む事無くただ粛々と神敵を屠る剣としての在り様に他ならない。そしてそんな存在が妻を娶れば余計なバグを発生させてしまう事に繋がりかねない。主君への忠義こそが絶対なればこそ絶対剣士は刃こぼれ一つ生じぬ無双の神剣足りうるのだ。故にウィリアム・ベルグシュラインに劇的（ドラマ）な物語が訪れる事は無い。主君への忠義と比肩しうる大事なものが出来てしまえば、その時点で主君以外の万象を断ち切る完全無欠の神剣足り得ないのだから――最も、もしも斬空真剣（ティルフィング）が愛を知り一振りの剣から人間へと生まれ変わるような事があればそれさえも寿ぎ利用するだけの器を絶対神（ヴェラチュール）は持っているが。

「そう決めつける事もないと思うがな。私も妻と出会うまではそう思っていたが、実際に彼女と出会った事で多くの事を学び多くの喜びを知った。お前の主君であるヴェラチュール閣下も常々言っている事だろう、この世は総じてあればあるほど良いのだと」

　そうした事情を半ば理解しながらもアルフレッドは兄として弟へのお節介を行う。それは傍から見る分には任務一筋で不器用な弟を気遣う社交的な兄という微笑ましい光景だ。いや傍から見ているだけではなく実際話している当人自身もそう思っているだろう。しかし、兄が送る弟への助言の中にはどこかこちらの生き方こそが人としての

正道なのだと主張する意図が当人自身も気づかぬレベルで含まれていた。
「ふむ、大分吹っ切れて来たけどまだ完全にとはいかないか。まあここまで来たらもう後5年と行ったところかな。順調にいけばそう遠くない内に子供も出来るだろうしね」
そしてそんなアルフレッドの様子を見て神祖スメラギは現時点での完成度を評し、そう遠くない内に歴代最優の使徒の誕生を予見する。
「流石の手腕だなスメラギ、改めて礼を言っておく」
「礼を言うのはこちらの方さグレン、君の使徒にする事だって出来ただろうにこちらの方に回してくれてありがとう。おかげでせっかくの逸材を無駄にせずに済みそうだ」
「何、あのまま俺の使徒にしては十中八九弟に対して劣等感を拗らせるのは目に見えていたからな。せっかくの逸材、みすみす使い潰すには余りに惜しいというものだ」
二人同時に己の使徒にすれば自分の力が大幅に弱体化するーーーそんなものはもはや遠い昔の話。この１０００年歩み続けて余さず己の糧として弱点を一つずつ潰してきたグレンファルトにして見れば当然ながらとうの昔にそんな欠点は潰している。では何故アルフレッドに対してそんな嘘をついたのかと言えば、無論そうでも言わなければアルフレッドが自らの使徒になる事を願い続ける事になると判断したからに他ならない。そして一度己の使徒にしてしまえば間近で見る絶対剣士の輝(ヒカリ)きに目を焼かれ続けてーーー当然のように厄介な事になるだろうという事が予見したが故だ。

「ま、ご覧の通り経過は極めて順調。その成長は極めて理想的と言って良い。この分なら１０年後には第二軍団（オプシティアン）辺りのトップは務まるようになっているんじゃないかな」
「種明かしをするとしたらその辺りだろうな。今明かしてはせっかく好転してきたのが台無しになりかねん」
「うん、それが無難だと思うよ。何、彼は出来る奴だから理解してくれるさ。何といっても君の使徒になっていたら大切な奥さんと出会えたかだってわからないんだしね」
　あの時嘘をついたのは偏にお前の未来を想えばこそだったのだという言葉、それを歴代最優の使徒となったアルフレッド・ベルグシュラインは当然のように理解するだろう。「感謝しています。それのおかげで俺は大切な妻に出会えたのですから」とそんなどこまでも神祖の期待通りの反応と共に……

悲願

マヤという伴侶を得た事でアルフレッドの栄達は加速していく。何しろ伴侶となったマヤは代々貴種(アマツ)へと仕える名門キリガクレの人間。言葉や立ち振る舞いに礼儀作法を武器とした交渉という分野に於いて一族ぐるみで重ねてきたノウハウがある。故に当然のように学ぶ事は数多いし、そんな名門の令嬢を妻に娶ったという事はすなわちアルフレッド自身が表の立場に於いても正式に上流階級の仲間入りを果たしたという事に他ならない。栄達を果たしていく教皇猊下お気に入りの出世株という事で好意に悪意、抱く感情は様々なれど必然的に増える裏の事情(神祖の存在)を知らぬ海戦山千の権力者との交流(暗闘)の日々。

「君も知っての通り上達の一番の近道は出来る奴を真似する事だ。奥さんを頼り、上流階級の出来る子たちを教科書にして積極的に学んでいきなさい。そして叶う事ならば奥さんのように単なる打算を超えた友人を作る事だ。曲者ぞろいではあるが、それだけに彼らは彼らで胸襟を開いて付き合える友人に飢えているものさ。何せ彼らにとっては交流の場こそがある種の戦場と言って良いからね。当然、市井の一般人のような付き

合いなんて見込めないわけ。敵を倒すのではなく増やさないように、そして味方を増やすように心がけて振る舞いなさい。それが政治という分野での戦い方さ」

栄達に伴い次々と齎される難題。次の戦場次の戦場次の戦場ーーー万能型（ジェネラリスト）としての究極を目指すというのはそういう事だ。しかし、それらに折れる事無くアルフレッド・ベルグシュラインは成長を遂げていく。主君への忠誠があった。心を癒してくれる愛情が存在した。偉大なる神祖（かみ）による導きがあった。何よりも自分よりもはるかに優秀な弟存在を超える為に死に物狂いになった過去（経験）があった。未来の希望と過去の絶望、それらすべてがアルフレッド・ベルグシュラインの糧となり、より良き明日を目指して進み続ける原動力となる。そして伴侶を得てから3年、齢２４となったアルフレッドは己を支える更なる宝を得る。

「私はお前が誇れる父であろう。愛しき我が子よ」

自らの血を引く嫡男の誕生。それによりアルフレッド・ベルグシュラインはかつて抱いた弟への妬心を昇華させる。無論それは完全に消え去ったわけではない、人間である以上自らがかつて思い描いた憧憬（ヒカリ）への焦がれは心の何処かに残り続けるのだから。しかし自らがその理想へと焦がれ手を伸ばし続けていれば腕の中で抱く愛おしく大切な小さな宝へと巡り会える事が出来なかったのも事実。ならばこそ此処に神祖スメラギが告げた神託は達成される。その手の中にある確かな幸福が彼に真の意味で現実（いま）を肯

定させる。

ーーーもしも自分があらゆる忠告を無視してそれでもなお弟を超えようと挑み続けていたら、あるいは自分も神祖が日頃言っているあらゆる条理を精神力によって粉砕する光狂いとなってそれは実現したのかもしれない。

だがそれは即ち自らの全てを剣に捧げる人生を選ぶという事だ。当然妻と巡り会う事は無かっただろう。当然今この腕に抱く愛おしい宝と出会える事も無かっただろう。

――――故に私はこの道を選んでよかったのだ。

心の中で今もくすぶり続ける憧憬への焦がれを自覚しながらも、現実を肯定するという事、それは即ち真の意味でアルフレッド・ベルグシュラインが大人になったという事である。故に神祖スメラギの神託は此処に成就され、神祖にとって理想的な歴代に於いても最優の使徒が誕生する。

後の事はもはや子細を語るまでも無いだろう。歴代最優の使徒は神祖の忠実なる手足として理想通りの働きを示し続ける。私事に於いては27で第二子を授かり、公事に於いてはその功績と能力を認められ31という若さにて聖教国の北部を統括する第二軍団の団長を拝命する。聖教皇国に存在する七つの軍団の内の一つの頂点、その地位は軽いはずもなく実績、運、人脈、そして神祖からの信用、そのすべてを兼ね備えた者のみが到達できる聖域に他ならない。当然ただ強いだけの人間がなれるはずもなく、

部下の統率、部隊の運営、後進の育成、各所との折衝能力、そして緊急時の決断能力ーーーそれらすべてを兼ね備えたと神祖に判断された者のみが就ける地位なのだ。

皇都からは離れる必要があるがそれは決して左遷する意味ではなく、むしろ神祖からの最上級の信頼の証とさえ言ってもいい。何故ならばそれはつまり神祖の補助がなくともやっていけるだろうという能力への信頼、そして神祖の下から離れたとしても神祖へと敵対的な事はしないだろうという忠誠心への信用、その双方を認められたという事なのだから。

「元気にやりたまえ、アルフレッド。そうだね、今度は15年位務めて貰ったら更なる上、グレンに次ぐ聖教皇国軍のNO2にでもなって貰うつもりだ。――――無論、これは君が奢る事無く励み続ける事が大前提だけどね」

冗談めかしながら告げられた釘差しに対して勿論ですと応じてアルフレッド・ベルグシュラインは皇都を後にする。そうして第二軍団（オプシディアン）の団長となった後もアルフレッドの為すべき事は変わらない。偉大なる神祖から与えられた数々の恩義、それを返すべく誇りと共に職務に精励する日々。それは騎士団長としての任が無論大半であったが、時に使徒としての裏の任務が与えられる事もあった。そう神祖がカンタベリーを建国し運営しているのは何も慈愛と善意によるものではない。全ては神祖（かれら）の悲願、旧暦文明の再建を果たす為に大規模な実験場を確保するために他ならない。故に神祖は躊躇う事無

く適当に見繕った、あるいは意図的に用意した村落に住まう無辜の民草を人柱として大規模な実験を行う。そしてそんな実験を行えば必然として隠蔽工作を行う必要があり、忠実で優秀なる使徒（しもべ）であるアルフレッドへと白羽の矢が立つ事も当然ある。

「承知いたしました。委細お任せを。然るべき措置を取りますーーーしかし何故そのような実験を？」

アルフレッド・ベルグシュラインは神祖の忠実なる手足である。故に下された命に対して別段躊躇う事無く頷く。自らの仕える偉大なる神祖が無用な殺戮などするはずなく、そこには明確な目的と理由が存在しているが故に。しかし、だからといって全く感情がない道具でも自分の頭で考えるという事をしない案山子でもない。故に下賜された専用の通信機越しに主君へとその目的を問うーーーそれはあるいは彼自身も気づいていない精一杯の主君に対する請願であったかもしれない。アルフレッド・ベルグシュラインは弟とは異なる道を歩んだ。妻や我が子という愛しい存在を見つけた。友誼を抱く友も出来た。ならばこそ私情を一切交える事の無い剣とは異なり、当然のように心は時に惑う。無邪気な様子で自らを慕う部下や我が子の姿、それらが彼らに誇れる自分であらなければならないという想いを生みーーー無辜の民草を犠牲にするという行為への忌避感情を生む。何せそれはこれまでも行ってきた国家を回す為に必然的に発生する必要最小限の犠牲とは決定的に異なるのだから。

「君からすれば当然の疑問だね。無論理由はちゃんとある。そしてそれを説明するためには神祖（ぼくら）の悲願について教えなければならないーーーこれを知っているのは神祖（ぼくら）以外は本当に極一部の限られた人間だ。他ならぬ君だからこそ信頼して話す、そのつもりで心して聞いて欲しい」

そしてアルフレッドの煩悶、それらすべてを神祖スメラギは正確に洞察している。何故ならばそれは他ならぬ自分自身もかつて抱いた想いなのだから。旧暦文明の再建という目的の為とはいえ、果たしてそんな人倫に悖る行為をして許されるのか？最愛（ヘレン）の妻がそんな所業をする自分を見たらどう思うかーーーと悩み悔やみ時に立ち止まり、それでも尚神祖スメラギは歩み続けた。だからこそアルフレッド・ベルグシュラインが妻を娶り、子を持った時からこうなる事を当然のように予見していた。故にどういう言葉をかければ良いのか、それも熟知している。

「今の世界は第二太陽によって作られた地球規模の牢獄なのさ。大破壊（カタストロフ）が教訓になっているんだろうね、どう足掻いても文明が一定レベルで打ち止めになるようになってしまっているんだ。そして一番その被害を被っているのは誰かと言えば、他ならない世を構成する大多数の弱者に他ならない。文明と技術が発達していなかった時代に於いて社会的弱者の救済なんて概念はなく、放置されるがままに野垂れ死ぬだけだったり、あるいは積極的に口減らしなんてものまで行われた事を想えばこれは理解できるだろう

？衣食住足りて礼節を知るという言葉があるが、自らの身を削っても他者に尽くすような人間はどうしたって少数派だ。多くの人間を救うには当然のように多くの資源（リソース）とそれを効率的に使う技術が必要なのさ」

　これまでと同様に神祖スメラギは迷える己が使徒を神祖（自分達）にとって都合の良いように導くべく優しく神託を下していく。

「だからこそ、それらを打ち破り世界と人を前へと進ませるためにも天に輝く第二太陽を掌握するーーーそれこそが神祖（ぼくら）の目的であり悲願に他ならない。そしてその為に必要なのが君達使徒に対しても授けている翠星晶鋼（アキシオン）に他ならず、その翠星晶鋼（アキシオン）を精製する為に必要なのが他ならぬ人間なのさ。

　勿論どれほど理由をつけようとも犠牲にされる方にとっては溜まった物ではないだろう、その罪深さを神祖（ぼくら）全員余す事無く理解しているとも。だけどその上でこれこそがこの新西暦（セカイ）の未来を拓くと判断した。彼らの犠牲を決して無駄にはしない。そうして第二太陽を掌握して文明再建を成し遂げればーーー多くの人間が救われるんだ。理解できるだろうアルフレッド、指導者はより多くの人間を救うために時として少数を犠牲にしなければならないという事が、他ならぬ君ならば」

　故にこそ未来の１０を救うために今を生きる１を捨てるのだと告げる神祖（かみ）の言葉に歴代に於いても最優と評価される傑作は

「我ら神祖（かみ）の御心がままに。改めて御身の為そして御身が作る未来の為にこの身を賭すことを誓います」

どこまでも神祖の期待通りの言葉を以て応じる。

「ありがとうアルフレッド、君ならばそう言ってくれると信じていたよ。これからも頼りにさせてもらう」

「ただ私の身に何かあった際には残された妻子についてはーーー」

「ああ、安心すると良い。功労者の遺族を無下に扱ったりはしないさ。もしもの時は当然何不自由のない生活が送れるように取り計らおうーーー尤も君にもしもの事があるなんてのはそれこそ万に一つ以下だろうけどね」

そう神祖達は目的の為ならば忠実なる使徒でさえも時として犠牲にする冷徹さを宿している。だがだからこそ報酬は惜しまないし、犠牲となった者の遺族への補償を疎かにはしない。それこそが最も怨みを買わずに済む方法であると同時に神祖の為にその命を賭す忠臣を作る術だと知っているが故に。

ならばこそ歴代最優（フルンティング）の使徒が所有者である神祖へと背く事は未来永劫訪れない。主君の為にと斬り捨てた血を己が糧としてどこまでも強くなっていくのだ。

役立たずのフルンティング

「ふむ、つまりは君の統括する北部で不審な動きをしている貴族達がいると」
「は、このタイミングでの蠢動。直接かあるいは間接か、そのどちらかは不明ですが十中八九ルーファス卿を殺した者達の関与がある事は明白かと」
平民の希望の星第一軍団(ダイアモンド)副団長ルーファス・ザンブレイブの死亡。それは大多数の者にとっては大いなる悲劇であったが神祖の忠実なる使徒であるアルフレッド・ベルグシュラインにとっては単なる凶行では終わらない。ルーファス・ザンブレイブはアルフレッド・ベルグシュラインと同様に神祖によって選ばれた使徒であった。すなわち通常では殺せない不死者であったという事だ。だからこそその死は重い。今回の敵はともすると神祖にさえもその牙を届かせ得るという事なのだから。
「君をこちらの援軍に来させない為の仕込みだろうね。未だに正体が掴めていない辺りかなり周到に準備して来たんだろう。そして使徒の中では最弱のルーファスを最初に狙って諸々試して、事後についても抜かりなしと来たものだ。やれやれイザナも言っていたが今回の敵はつくづく優秀なようだ」
ともすると傲慢にも見えるスメラギの態度だがその実油断や慢心とは無縁だ。何故

ならば彼こそ神祖の中でも究極のたたき上げ。神祖四人の中で最年少で在り、一度は全てを投げ出した挫折の経験がある。ならばこそ今この時も愚直に、真面目に、どこまでも油断なく疑い続けて考え続けているのだ。

「いっその事リスクを覚悟で北部を部下達に任せて精鋭を率いて私がそちらに向かうというのは？こちらの蠢動が私をくぎ付けにするのが目的である以上、確実にそれで敵の狙いを外す事は出来るかとーーー目下最も脅威となるのは御身より賜りし不死を突破した神殺し。それを始末した後であるのならばその他の不穏分子が如き如何様にも料理できるかと」

「ふむ……」

２０年以上の付き合いとなる現代の腹心の言に一理ある事をスメラギは認めた。戦いの基本はとにもかくにも相手の土俵に乗らない事にある。それはつまり相手の思惑を外すように動くべきという事だ。リスク覚悟での最優の使徒の皇都への参戦、それは確実に目下潜んでいる神殺し陣営の意表を突けるだろう。

「いや、君はそのままでいてくれ。今回の敵はかなり周到に準備してきている、アンタルヤとアドラーのどちらか、あるいはその双方かな。まず間違いなく後ろ盾に付いていると見て良いだろう。となれば現状潜伏している神殺し達はあくまで先遣隊に過ぎず、本格的な援軍が後から送り込まれてくる可能性は高い。正面の相手に注力しているとこ

ろを横から思いっきり殴りつけられるというのは御免だからね。君には予備戦力としていざという時に備えておいてもらいたい」

そのうえで神祖スメラギが下した判断、それは時期尚早というものであった。敵の思惑に乗らないようにする事は戦いの鉄則だ。しかし同時に常に予備戦力を用意しておくのもまた同様に戦いの鉄則なのだ。それは遠い昔神祖スメラギがまだ駆け出しの単なる超常の力を持ってしまった子供に過ぎなかった時に信頼していた初代使徒（エドワード）に教わった事。そしてスメラギ自身それから潜り抜けた幾多の修羅場でその正しさを実感した教えでもある。

「単純な戦力という点であればこちらには君の弟とグレンが居るし、遠からずアメノクラトの量産も叶うからね。ならば無理をして君を戦線に投入するよりは想定外に備えて貰う方が良い」

「御心のままに」

かつてであれば心に荒波を巻き起こした戦闘力に於いて自分が弟の後塵を拝しているという言葉、それを受けてももはやアルフレッドの心には小波も巻き起こらず。粛々と主君の命令を受け止める。

「うんうん、君も成長したものだ。かつてであればこんな事を言われればわかりやすいほどに顔に出ていたというのに」

「これも偏に猊下のおかげです。未熟者を根気強くここまで導いて頂いた事、誠に感謝の念が堪えません」

「何、教え子が優秀だったからね。僕としても大分やりやすかったよーーーなんにせよそちらは任せたよ、アルフレッド。あるいはこちらからの指示が途絶える可能性もあるが、その時は君が最善と思う決断をしてくれればいい」

アルフレッド・ベルグシュラインが歴代最優と評されるのはその総合値の高さ故だ。ならばこそ神祖スメラギは信じる、自らが手塩にかけて育て上げた歴代最優（フルンティング）の使徒の性能を。単純な戦闘力という点に於いてはウィリアム・ベルグシュラインに譲れど、別動隊を率いる将として見ればアルフレッド・ベルグシュラインこそが最優なのだから。

「御心のままに」

そしてそんな主君から寄せられる信用にアルフレッドは確かな喜びを感じる。自らの主君の持つ人間離れした冷徹さ、それをアルフレッドは当然承知している。自分が早々替えの効かない駒であることを自負しているが、それでも自分という有用な駒を失った場合の損失（コスト）に対する戦果（リターン）が勝ると判断すれば神祖は躊躇う事無く自分を犠牲にするだろうと。そしてその事を知りながらもアルフレッドの主君への忠誠心は揺らがない。それは弟のように自らを道具として規定しているからではない。今日の自分の幸福、それが神祖のおかげでありその事に対する感謝の念があるからだ。犠牲にされた

者は悪神と思うだろう、しかしアルフレッド・ベルグシュラインにとって神祖はそのまま行けば野垂れ死ぬしかない自分達兄弟を拾い育て、そして今日まで導いてくれた恩神なのだ。

無論アルフレッドの中に存在するのはそうした綺麗な感情だけではない。一度敵に回してしまえば自分と家族は破滅するしかないという恐怖や保身の感情も当然存在する。しかし、だからこそアルフレッド・ベルグシュラインが神祖へと背く事は無い。逆らえばタダでは済まないという畏怖と従い続けたからこそ今日の幸福があるという信頼、そして育てられた恩義。その三つが強固な柱となり忠義の心を支えているが故に。アルフレッド・ベルグシュラインは所有者たる神祖にとって幾多の勝利を齎す歴代最優(フルンティング)の使徒足りうるのだ。

・・・

「そう、その位置だーーーしっかり庇えよ守護竜殿(ニーズホッグ)」

結論から言おう。結果として神祖スメラギの備えは無駄に終わった。人の持つ優しさによって牙を抜かれた邪竜(ニーズホッグ)は絶対神(ヴェラチュール)の掌から逃れ出る事は無く。

非常時(アルフレッド)の備えを投入するまでもなく、絶対神が作りし神天地(アースガルド)が産声を挙げる。そして絶対神(ヴェラチュール)に選ばれなかった用済み(フルンティング)の名剣は数千万の臣民と同様に物言わぬ結晶の樹木と化す。そして誰もが神となれる神天地(アースガルド)で絶対剣(ルフレッド)に成り損ねた人間は自らの運命の相手

と邂逅する。アルフレッド・ベルグシュラインの運命の相手、それはかつて超える事を切望した弟（ウィーリアム・ベルグシュライン）でも孤児（グレンファルト・フォン・ヴェラチュール）である自分を拾い育ててくれた親でも自分を最優（神祖）の使徒（メッセンジャー）にまで導（ミチビ）いてくれた主君（ラギ）でもない。

「君と巡り会えた事、それこそが私の人生における救いだマヤ」

それは自らに愛を教えてくれた最愛の妻に他ならない。何故ならば彼は現実と折り合いをつけて完全なる主君の道具となる道を選ばなかった人間だから。神祖へ捧げる忠義に嘘などない。だがそれでも彼の中にある一番強い想いは家族への愛情に他ならない。そしてそれは妻であるマヤ・キリガクレも同じ事。神祖への畏敬の念は存在する。しかしそれでも彼女の中にある一番の想いは夫と我が子ーーーすなわち家族への愛情に他ならない。ならばこそアルフレッド・ベルグシュラインとマヤ・キリガクレが導き出す勝利の答えは極めて平凡なものとなる。すなわちそれは新西暦（現行世界）の存続に他ならない。何故ならば彼らは幸福だったのだから。愛するものと家庭を作り、子宝にも恵まれてその成長に一喜一憂する日々。今がずっと続きやがてどちらも皺くちゃの老人となって孫たちがその死を悲しんでくれる位の年齢でその生涯を終える。そんなささやかでされど現実で叶えられるものはそうはいないありきたりな願いに他ならない。

「ああ、いいとも。それがお前たちの思い描いた勝利だというのならば俺は当然祝福しよう。アルフレッド、これまでご苦労だった。一足先に妻共々神天地（マヤ アースガルド）で幸せになると良

い」

かつてその剣となる事を夢見た絶対神からの寿ぎ、それを受けてアルフレッド・ベルグシュラインは神々の最終戦争（ラグナロク）に参戦する事無く完全に舞台から退場する。

「諦められるか。それでも僕はッ――――！」

忠義を捧げた主君が交わした約束を支えに最期の突撃を敢行する時に力になる事もなく

「……無念だ。初めて口惜しい」

幼き日に共に助け合うと誓った弟の最期に居合わせる事もなく

「邂逅せよ、まだ見ぬ運命。汝ら衆生が欲する明日を比翼連理とするが良い」

今の幸福な世界の存続を願うが故に絶対神の宿敵足る人奏者を否定する事もなく

「はは、久しぶりだなお前たち……見ているか？-ようやく俺はここまで来れたよ。無様なほどもがいて、足掻いて、おまえ達との出会いと別れを糧にして」

今を生きる人間であるが故にかつての主君の窮地に駆けつける忠臣の列に加わる事もなく

「御意ーーー我が刃、どうか存分にお振るい下さい。それを以て、俺は邪竜に一矢報いたとしましょう」

最期の最期まで主君の力となり続けた万象断ち切る無双の神剣（ティルフィング）とは対照的に。

ならばこそその身はフルンティング。どれほど名剣と謳われていても真なる強敵との戦いに役立つ事は無かったコケ脅し。役立たずのフルンティングなのだ。

凡庸なるアルフレッド（バッドエンドＩＦ）

カンタベリー聖教国は新西暦に於いて最も平和な国だと言われている。海という天然の防壁によって囲まれた島国という立地、宗教国家という立ち位置を利用した巧妙な外交的な立ち回り、これらが幾度となく侵略者の野望を挫いて来たのだ。それはクリストファー・ヴァルゼライドという稀代の英雄が約束された玉座へと戴冠を果たした軍事帝国アドラーも例外ではなかった。カンタベリー本土への侵攻計画は幾度となく策定されたがそれが実行に移される事は無かった。無論外敵による侵略を受けない状態だったからと言って、国内の政治それ自体が腐敗していれば到底平和とは言えなかっただろうが、そちらもまたカンタベリーはどの国よりも安定していた。平民に生まれたものが立身出世を目指すという事こそどの国よりも困難だったものの、カンタベリーに存在する貴族階級は他国に比べて良識的な者が多かった。流石に腐敗と無縁等という事こそなかったが、そうした不正はやがて暴かれて裁きを受ける事が聖教国の常であったのだ。神の祝福を受けた国、それこそが我らが住まうカンタベリーなのだと民は信じた。信じていたのだった。

「……」

〝牢獄である今の世界を解放する為〟そんな大義の下犠牲となったある村落の事後処理、それを終えた神祖の忠実なる使徒足るアルフレッド・ベルグシュラインは深いため息を吐き出す。

「これは……第二太陽によって牢獄となった今の世界を解放する為のものだ。彼らの犠牲は決して無駄などではない。神祖（カミ）の悲願が成就した暁に彼らのような弱者こそが恩恵を受けるのだから」

そう主君である神祖によって教えられた大義名分（お為ごかし）を自らに言い聞かせるようにアルフレッドは口にする。

「何より神祖の方々はこの犠牲以上のものをこの国に齎し続けて来た。聖教国が新西暦の中で最も平和な国だと言われているのは偉大なる神祖（かみ）が居たからこそだ」

それは事実だろう。本来ならば起こる階級制に伴う特権階級の腐敗と制度の硬直。そうしたものが起こらず腐敗した貴族が軒並み粛清されているのも、時代の変化に対応して大規模な政変が起こらぬまま制度が適宜修正されているのも総て手綱を握る神祖が居たからこそだ。

数の収支で物事を考えるなら、あるいは国というものを運営する巨視的な視点で見るのならば、この世界に生きる誰よりも経験を積みながらも、時代の変化に対応するべく

謙虚に学び続ける絶対者が君臨している益の方が明らかに勝っているだろう。

「そうだ、感傷に流されるべきではない。手の白い支配者など居はしないのだから。１０を救うために１を犠牲にする選択を取らねばならぬ事があるのが上に立つ人間だ。騎士として功績を挙げる為に幾度となくやって来た事ではないか？ただ今回犠牲となった１によって救われる１０が今ではない未来の人間だけだという事。未来の投資の為にやむなく今の人間へと負担を求める事もまた国を長期の視点で治める場合は避けては通れぬ事だ」

それも事実だろう。アルフレッド・ベルグシュラインは第二軍団団長という要職に就いている男、命の計算が出来る人種だ。これまでとて１０を救う為に１をやむなく切り捨てる等という事は散々にやって来た。むしろそれが出来ぬ者は一兵卒ならまだしも多くの部下を預かる士官には向いてない人種だろう。故にそうした軍務とこれの何が違うというのか？最大多数の幸福の為に少をやむなく切り捨てるという点に於いては何も変わらないではないかーーー等ともっともらしい詭弁で以てその行為を正当化しようとする。

「何よりも今日の私があるのは総て偉大なる神祖（かみ）が弟共々孤児であった我々を拾い上げて育て導いて下さったからこそ。お前はその恩義と信頼に背くというのかアルフレッド？そのような忘恩の行為、それこそ騎士の道に背くというものだろう」

そうしてアルフレッドは自らの中にある罪悪感、それを最もらしい理屈で以て蓋をする。

「……らしくもない感傷だな。こんな事はもう何度もやってきたというのに。今更最もらしく罪悪感に浸るなど本当にらしくない」

一回目は煩悶した。主君である神祖スメラギから大義の為の必要な犠牲だと教えられた後も妻と我が子、そして真の意味で騎士の鑑という形容に相応しい豪快に笑う友の顔がちらついた。今の自分は本当に彼らに誇れるような男なのかという想いが過った。しかしそんな自分の苦悩を見透かしたかのようにかけられた言葉によってそれらを吹っ切ったはずだった。そしてそれから幾度も神祖の求めるままに実験を行った後の後始末を行ってきた。そうして一度一線を越えてしまえば後はもう流れ作業だ。相応の葛藤を抱けどもそれらを飲みほす（誤魔化す）事にも相応に慣れてきたはずだったというのに。

「……ザンブレイブ卿の影響か」

数週間前まで自らの部下として働き弟の下へと栄転した後輩（新たな使徒）の姿、それをアルフレッドは思い浮かべる。巷の風評にあるような傑物というわけではなかった。慈愛に満ちた聖人というわけでもなかった。欲と怠惰に流されやすいその様はとてもではないが巷で噂されている〝平民の希望〟だなどとはとてもではないが思えないだろう。

「……彼は素朴に信じていたな。騎士とは民を護る存在である事を」

だが彼には素朴な善性があった。既に使徒というそこらの貴族を歯牙にかけないこの国の上流階級へと仲間入りを果たしていながら捕食者側の論理に染まり切っていなかったのだ。そしてそれこそが傑物でも聖人でもない俗物でありながら、ルーファス・ザンブレイブが広告塔として見込まれて使徒へと選出された理由だったのだろう。そんな平民の為の騎士を見事演じて見せているルーファスの姿がアルフレッドの心の中に堆積していた想いを刺激したのだ。

「……感傷に囚われるな。私とルーファス卿とでは求められている役割が違う。彼はアレで良い。ああいう男だからこそ彼は平民の希望足り得る。私は違う。私は神祖の忠実なる剣にして調停者。皇国守護騎士団、その一角足る黒曜騎士団（オブシディアン）を滞りなく運用する事こそが私の役目だ。そうだ、私ならば理解出来る。呑み込む事が出来る。これらの葛藤を。それこそがルーファス卿でもウィリアムでもなく私に求められている役割なのだから」

情だけでは国や組織というものは回らない。さりとて理や利のみでも人間は動かない。情と理、そして利。それらを上手く使いこなす事こそが上に立つ者には求められる。そしてそれこそが理に従い主君の敵を討つ絶対剣士でも情によって衆生を照らす雷鳴福音でもない、最優の使徒足るアルフレッドへと求められている役割だ。

「そうだ……それこそが私に求められている役目だ。綺麗ごとだけでは世の中というの

は回らぬし、人間とはそうそう理想通りに生きられぬものなのだ」
　自分を騎士の鑑と信じ尊敬する息子の姿、それがアルフレッドの脳裏に過る。感じた後ろめたさ、それを封じ込める。もしも自分が感傷に囚われて己が役割を忘れようものならそれこそ待っているのは家族そろって破滅の末路なのだからと誤魔化して。
「すべては我らが神祖（カミ）の御心がままに」
　故に抱いた葛藤は内面で消化され、表に出るのは神祖への忠誠の言葉。
　神祖の為の名刀（フルンティング）を最優の使徒足らしめる恩義、信頼、畏怖の三つの柱は依然健在。
　自らの中に確かに存在する罪悪感を主君への忠誠で以て糊塗してアルフレッド・ベルグシュラインは愛する妻子には決して言えぬ悪事へと加担し続けるのであった……
・・・
「やあ久しぶりだねアルフレッド、壮健そうで何よりだよ」
「教皇猊下に於かれましてはご機嫌麗しく。して危急の要件とは一体？ただならぬ事態が起こったとは理解しておりますが」
　主君である教皇ーーー否、神祖スメラギより下された危急かつ内密の話がある故至急皇都クルセイダルに参上せよとの命。それに応じて神祖スメラギの下を訪ねたアルフレッドは居合わせている面々の顔ぶれで否応なしに事態の重要性を理解する。四柱の神祖とそして現在いる使徒の中でも自分と同じく最古参である絶対剣士。そして最優

の使徒と謳われる自分。わずかその6名のみ。
本来ならば居合わせて然るべき他の使徒も、そして神祖へと忠誠を捧げる聖教国の中枢を担う数百名の精鋭も居ないというかつてない事態。情報を知る者を最低限にしなければならない特級の秘匿事項に当たる何かが話される事は間違いがなかった。
「君はとても良く神祖(ぼくら)に仕えてくれた。単純な戦闘能力という点ではそこにいるウィリアムに譲れど総合力という点に於いては使徒の中でも最優と言って良い。もう数年もすればグレンに次ぐ皇国騎士団のＮＯ２に就いて貰おうというかつて伝えた言葉、これは僕ら四人全員の総意だ」
「……勿体なきお言葉」
主君からの絶賛と言って良い自身への賞賛。それを受けてアルフレッドは喜びと同時に訝しむ。
はてこのような前置きをわざわざするとは一体どういう事だろうか?これから行われるのが自分が皇国騎士団のＮＯ２となるに真に相応しいかを推し量るための最終試練という事なのだろうか?と主君からの続きの言葉を待つ。
「故にこれから起こる事、それは決して君が何かの不忠をしたというわけでも失態を犯したというわけでもない。運命の皮肉とでもいうべき物であり、まあ端的に言って間が悪かったというだけの話だ。納得しろとは言わないから理解してくれたまえ、僕らに

とっても苦渋の決断だったんだ」
「は？それは一体……」
　主君から告げられた謝罪の言葉。それにアルフレッドの意識が割かれた瞬間
「!?教皇猊下！これは一体ーーーゴフッ。ガ……ハ……」
　突如として起こった自身の胸の中にある翠星晶鋼の消失という慮外の事態。
　それによってアルフレッドの意識が驚愕で埋め尽くされた刹那、振るわれた二振りの神速の剣閃がアルフレッドの両の腕を飛ばし、胸部からは真紅の花弁が舞い散った。
「な……ぜ……」
「すまんなぁアルフレッド、お前は何も悪くない。スメラギの言う通り、とても良く俺達に仕えてくれたとも」
「ええ、本当に。貴方はこの千年の中でも最上位と言って良い位よくできた使徒だったわ」
「故にこれは我らにとっても真実苦渋の決断という奴なのだよ。すまんなぁアルフレッド、本当に悪いと思っている。せめてもの誠意としてお前の事は非業の英雄として語り継ごう。どうか安らかに眠ってくれ」
　奇跡を起こす余地など微塵も与えない。どうか真実を知らぬままにわけもわからぬままに逝ってくれと放たれた神祖イザナの星光がアルフレッドをオウカごとのみ込み

その身体を塵すら残さず消滅させる。
　不死の所以たる翠星晶鋼を奪われたアルフレッドの肉体は神祖オウカとは異なり、再生されず。アルフレッド・ベルグシュラインは何故自分が神祖より切り捨てられたのかもわからぬままにこの世を去ったのであった。
・・・
「すまないねアルフレッド……本当にすまない」
　ほんのわずかな間皇悠也はその目を閉じて手にかけた自らの腹心へと黙祷を捧げる。
「辛いか、悠也？」
「そりゃあね。アルフレッドはとても良く仕えてくれたというのにこちらの都合で一方的に切り捨てたんだ。とても胸が痛むよ。出来る事なら彼にはもっと幸せな終わりを迎えて欲しかった」
　嘘ではないのだろう。スメラギの語る言葉に自分が殺した部下に対しての確かな哀切の念が宿っていた。
「うん、でも大丈夫。もう乗り越えたから。別にこちらの都合で部下を一方的に切り捨てるなんて事この千年散々やって来た事だしね。今更この程度で休んでなんてられないよ」
　しかしそんな人間らしい様子を見せていたのもほんのわずかな間。３秒後そこに居

たのは本当に哀しんでいるのか？と疑いたくなるほど常と変わらぬ姿であった。
「ああ、そうだな。俺達には責任がある。世界を今のように変えてしまった者として、そして数多の命を犠牲にしてきた者としての責任が。立ち止まる事など許されない。より善き世界を作る事で彼らの死に報いねばならないだろう」
　そのためにこそ神祖は千年もの間歩み続けたのだから。
「しかしまあとんだ運命の悪戯もあったものよなぁ。まさかアルフレッドの娘が我らの計画の要となる集束性と拡散性に高い素養を持った魔星となる素質を持っていた等と。
　これが単なる平民であれば最優の使徒を処分する等という苦渋の決断を下さずに済んだのだが……まあ実際にそうであった以上は致し方ない。良く仕えてくれた腹心であろうと市井を生きる民であろうと同じ命には変わらないのだから。
　犠牲に見合うだけの益があると判断したならば、躊躇う事無くそうしなければならんだろう。それこそが統治者足る者の務めというものなのだから」
　神祖イザナはこの国とそしてこの国に生きる民を愛している。願う事ならば総ての者が幸福に暮らし、その生涯を終えて欲しいと心から思っている。
　そしてその上でそんな民を己が大望の為に犠牲にし続けたのだ。ならばこそその天秤に乗ったのが高く評価していた忠臣の命であろうとも躊躇う事は無い。
　その死以上の益があると判断すれば躊躇う事無く犠牲にする。ーーー何せこの千年

の間に彼女は忠臣どころか実の我が子を相手にしてもそれを行ってきたのだから。
「でも本当に良かったの？私の目から見たアルフレッドはこの千年の中でも最高峰の完成度を誇る使徒だった。やり方次第では彼自身の手で自らの娘を差し出すように持っていく事だって出来たのではないかと思うのだけれど？」
オウカ・鳳・アマツはアルフレッド・ベルグシュラインの事を高く評価していた。少々危ない傾向が見える自らの使徒も見習ってくれれば良いと思う程に。故に惜しく思う。必要なのはあくまで彼の娘なのだから、やり方次第では彼を殺さずに済ませられたのではないかと情ではなく合理の側面から惜しく思う気持ちが存在するのだ。
「それはないよ、オウカ。断言出来る。その二択を突きつけたらアルフレッドは迷った末に家族を選ぶ男だった。だからこそこうするのが最善だったのさ。散々に迷った末にそれでも自分にとっての大切な少を護ると決めた存在、そうした手合いがどれだけ厄介かはこの千年の間で散々味わって来ただろう？」
アルフレッド・ベルグシュラインを最優の使徒足らしめていたのは彼の神祖への忠誠を支える三つの柱が総て健在であればこそ。
その柱に神祖に従い続ける場合愛する家族が死ぬ事になるという亀裂が走った時、名刀は主に仇なす魔剣へと変貌する。
それこそ初代使徒エドワードにさえ匹敵する脅威になるだろう。だからこそ真実を

教える事なくわけもわからぬままに逝って貰うことにしたのだ。
「光の為だの明日の為だのに戦う亡者共も厄介だが、愛の為に戦うと決めた者もまた厄介だからなぁ。先手を打っておくに越したことはない」
「そう、貴方達がそういうならまあそうなのでしょうね」
　オウカは自らがこの手の感情の機微に関する分野では４人の中で一番疎いという自覚がある。ならばこそそうした機微を熟知しているスメラギとイザナの両名がそういうのならばそうなのだろうとあっさり受け容れる。
「しかし良かったのかいウィリアム、何せ今回は君にとっても相手が相手だ。拒否したとしても別段僕らはそれを咎めるつもりはなかったんだが……」
「お言葉ですが、質問の意味が分かりかねます教皇猊下。真実を知った時兄はその身に課せられた責務と忠誠よりも家族への情愛を優先させる人種であり反乱の危険があった。故に先手を打ち処断する必要があった。そしてその犠牲に見合うだけの益は確かに存在する。猊下の語った論は筋が通った物であり神祖の剣足る私がそこに背く道理など全くないように思うのですが？」
　淡々とした様子で刀剣は答える。そこには実の兄を手にかけておきながらも後ろめたさを感じるような素振りも自己弁護の色も全く見られない。陶酔とは程遠いどこまでも透明な神祖への忠誠だけが存在した。

「いや、そうだね。君の言う事はとても正しい。つまらない事を言った。忘れてくれ」
この千年の中でも初めて見る最高傑作。その完成度を前にスメラギは苦笑しながら自らの不明を詫びる。
「よくもまあ此処まで仕込んだものだなぁ。兄は兄で最高峰と言って良い完成度だったがそれでも流石にこれはけた違いだ。ここまでの完成度の奴を見るのはこの千年でも初めてだぞ」
「ウィリアムは俺が育てた！……等と言えれば格好が付くのだがな。こればかりは本人の素質に依る部分が大という奴だろう。いやはや師として俺も鼻が高いというものだよ」
仲間からの賛辞それに対して誇らしげに応じた後絶対神は神剣へと託宣を降す。
「さて斬空真剣（ティルフィング）よ、お前にはもう一働きして貰いたい。残されたアルフレッドの妻子、これを確実に仕留めて来て貰いたい。お前ならばそれこそ相手が何もわからぬままに一家全員を葬り去る事が出来るはずだ」
「仰せのままに、我が主」
義姉を甥を姪をその手にかけよという主君の命にも絶対剣士は何の反発も見せない。何故ならばそれは無意味な殺戮ではなくその犠牲に見合うだけの益がある必要悪なのだから。主君の命じるままに一切斬滅、それこそが斬空真剣へと課せられた役割なのだ

から。
「イザナ、君の方は」
「ああ、わかっているとも。アルフレッド・ベルグシュラインとその一家は聖教国に恨みを抱くテロリスト共によって殺されて非業の死を遂げたーーーとそんな感じの情報が出回るように手を打っておくとも。せめてもの誠意として悲劇の英雄として語り継いでやらねばな」
「頼むわよ。シュウとリナも流石にあの子の死までですんなり呑み込める程にはまだ大人にはなれないだろうから。その辺しくじると面倒な事になりかねない」
「わかっているとも。何せその筆頭が私の可愛いルーファスなのだから。アレはアルフレッドに劣等感を抱きながらも良くしてもらったと感謝も尊敬もしていたからな。そのアルフレッドを我々が殺した等という事は知らない方が幸せというものさ。真実というのは何時だとて耳に痛く受け止め難いものだからなぁ」
　自らにとっての都合の良さ、それをさも相手の為を思ってやっているようにすり替えながら狡猾なる四柱の悪魔は事後の対応へと当たっていく。
「ああ、そうだな。アルフレッドの奴は多くの者から慕われるとても良くできた奴だった。その死を知り、多くの者が嘆き哀しむ事だろう。そしてならばこそ我々は立ち止まるわけにはいかない。その犠牲、必ずや明日へ続く礎へと変えねばな」

上に立つ者の責務。それはその死を嘆き哀しむ事等ではない。その死が無駄ではなかったと証明してやる事なのだと。

「無限の希望も絶望も重ねた総てが俺達の力だ」

四柱の神は止まらない。千年歩み続けた末の〝勝利〟、それをその手に掴み取るまでは……